

箱根靈驗度仇討

二

十一冊目

箱根 龍の成

〔解題〕 享和元年八月四日刊行、同年十一月三日から道頓堀東の芝居（座本豊竹吉太郎）で興行。作者司馬芝
曳。

實説は明かでないが、天正十八年正月廿一日に飯沼初五郎が兄の仇加藤幸助を討つた事件で、「太閤記文録」にあるのを脚色したのだと「傳奇作書」續篇の中に見えて居る。伏見桃山築城の總奉行柁桐豊岐守の配下であつた佐藤剛助が同僚飯沼三平を妬んで暗殺し、飛龍丸の寶劍を奪つて北條氏に身を寄せて瀧口上野と改めて威を振ふ。三平の弟勝五郎は忠僕筆助と共に復讐を企て、勝五郎は三千助と變名して北條氏の臣九十九新左衛門に僕仕して敵を搜索したが、その間に新左衛門の女初花に想はれて遂に夫婦となつた。然るに豫て初花に戀慕して居た上野の迫害を受けて新左衛門は切腹し、二人は流浪の身となり、奥州路をさすらひ、勝五郎は風疾のために覺となつて非人と迄零落したが、奥州白石の庄屋徳右衛門の情で轡車を錢別に與へられ、貞實な初花に引かれて箱根に向ひ、初花の身を捧げての祈願によつて初五郎は恢復し、忠僕筆助と共に上野を箱根權現の社前に討果すといふ筋で、十二冊より成り、その十一冊目の口錢別の段と、こゝに收めた箱根山瀧の段とが名高い。

オクリてこそ入りにけり。忠孝の身降る。さぞ寒かつたでござんせうな。アイ地と呑込み氣を配る。折からどやにも因果は廻りくる。ホシカ、リ片輪車ヤ。おれは車に居れば辛抱もしよ。非人ども。振舞ひ酒の戻り足。初飯沼を。乗せて綱手を初花が。引く。いが。大きな體を乗せて。かよいそ。花それと見。調オ、治郎さん。八さん。も。たよわき女氣に心ばかりは勝五郎。なたが引く苦勞。過分なぞや嬉しいぞ。月の輪さん。よい貰ひがあつたやら。車の助け竹杖を持つ手も寒き雪おろよ。アレ又そんなこと。女房に禮いふ。打揃うてよい機嫌。施行はまだあるかし。箱根風の足。フシやう。庭に。者がどこにあるものぞいた。それはさ。え。地と尋ねに治郎は目を据ゑて。調何引きとめ。地非人施行と書いた札。うと。この阿彌陀寺は氏政が菩提所。ぢや。施行はまだあるか。あるか無い嬉しいや爰と立寄つて。調勝五郎様。こ今日の法事を手がかりに。敵の安否を。か往て見りや知れるわい。一體マア此の邊りは山家ゆゑ。紅葉のあるに雪がア、コリヤ壁に耳。心を付きやいの。治郎様に。すばら。ぬかすはド、ど

ハ、ハ、ハ、ハ。地と諸共に。笑ひ上戸の
月の輪が。むつくと起きて兩人が。腰
息を窺ひ手をつかへ。調若し旦那様。
初花様。筆助殿。ハツア只今この所で
承れば。北條氏政今朝鎌倉を發足し。
參觀との取沙汰。地と聞くより飯沼車
をにじり。調ナニ氏政が上洛とな。エ、
忝い。敵討の時節到來。シテ。上野も
ろとも發足したか。ハツア。否やの安
否は此筆助。大磯中食と承れば。近寄
り様子を窺はん出かした急げ。ヤして
來いな。地と尻引つからげ。フシ大磯さ
して駈り行く。地跡に夫婦は勇み立ち。
天を拜し地を拜し。悦ぶこなたに臥し
たる兩人。むつくと起きて。調ヤア汝
は飯沼勝五郎。おのれは初花。侍の頼
みで詮議する。サア有様に白狀せい。
イヤ。我々は左様な者では。ヤないとは
言はさぬ。今三人が呟き話。寝た顔で皆
聞いた。大磯へうせた月の輪めは。筆
助といふ力強。出し抜いたらもう佛の
椀。サア甕め。ぬかせ。地ぬかさに
や斯うぢやと締めかゝる。腕首かつい
で雙方どつさり。性慾もなく起上り。
掴みかゝるを手玉につく。手練と手練
に兩人は。コリヤ叶はぬとフシ逃げて
行く。地油斷ならじと勝五郎。見廻す
後に立切る隙子。さつと開けば瀧口上
野。火鉢にかゝり寛々と。見下す敵は
優曇花の。時待ち得たる對面と。初花
諸共つめ寄つて。調珍しや瀧口上野。
うぬを討たうと此年月。艱難を盡した
はやい。その方故に父上も。むざ／＼と
御切腹。恨みはおのれ兄の敵。父様の
仇。サア尋常に勝負。地フシ／＼と詰寄
つたり。調ム、ハ、ハ、ハ、ハ。汝が兄
の三平さへ。只一討ちにした某。腰抜け
分際で。敵討とはしやらくさい。うぬ
れと見るより二人は仰天。絶えて久し

き聲娘。なう懐かしと言ひたさる。身たれば。今頃はもう寂滅。思案しかへ。と。地砂に摺付けにじり付け。詞何とはいはば猿の猿轡。スエチ泣くより外の事て某に従へ。應とさへ言へば其腰抜け。初花。是でもないや。サアそれは。ヤぞなき。地瀧口はしたり顔。詞何と見母諸共に助けてくれるが。そちへの心ア猶豫に及ぶは不承知な。よい／＼ソたか。娘を所望すれども與へず。くたばつた新左衛門が死跡闕所に致させ。中。人我につらければ。我また人につレ母親めから刺通せ。地畏つたと取つばつた早蕨めを摘にしたわが威勢。立てうと。花。何と憎うはあるまいがな。地と猫。詞ア、コレマ、マア待つて下さん伏せうと某が心任せ。甕めを思ひ切撫で聲のフシ面憎さ。地喰付いてもと思へども。眼前母と夫の命。我が身一れて寝るか。サア。／＼。サア。／＼。上野が奥になれば。九十九の家を。つに比ぶれば。何惜しからじと思へど。何と詮方なき身ぞと思ひ極めて。詞得取立て。早蕨めを始と崇めてくれる。も。現在敵に肌ふれて枕を交す苦しみ。身は八つ裂きの刑罰と。思へば胸心ちやわいなア。抱かれて寝るな。アし。否か。應か。生死の境。初花。サどうは。身は八つ裂きの刑罰と。思へば胸心ちやわいなア。抱かれて寝るな。アだ。地と非道の詞も差しあたる。人質も張裂けてフシ泣く音。血を吐く思ひ。其代り二人のお命。ムウ得心と取られて初花も。スエカ、リ俱に無念の庭へ下り立つて。勝五郎が襟髪取つてエ、命冥加な腰抜け。地と突放して勝五郎。齒ざし歯切り。胸先へ差込む癪。アツと悶える有様に。初花恠り駈ぐつと引据ゑ。詞サア。勝負せぬか。立上り。詞ソレ。縄付めも助けてら寄つて。詞ア、コレ勝五郎様。エ、立合はぬか。ナ、何だ。とこぼえるか。せ。地ハツと其儘猿轡縄目も一度に解時も時と。折惡う此癪氣。せめてマアは無念なか。足が立たぬか。ムウ手も叶き捨て。白洲へかつばと蹴落せば。せ筆助なりとも居やつたら。コリヤ女。其はぬか。フ、いちらしや。此様なき止められし溜涙わつとばかりに取亂奴めは出し抜いて。跡より多勢をかける態をひろいで。敵討とはしやらくさい。詞ア、コレ母様。／＼いなう。其お

歎きは尤もながら。是非に一羽は狩人の劔羽吞込む瀧口。久馬も跡に引つ添づをれて。亡き身と聞けば力なく。せの。網にかゝつた身の因果。此身さへ得て。フシ小田原さして出でて行く。心すれば。波風なう納まる此場。私や見送る母は正體なく。わつとばかりにそれが本望でござんす。サア。本望ぢや伏沈む。勝五郎顔を上げ。御尤もに依つて勝五郎様。必ずお身を大切に。ぢや御尤もぢや。我々に代り敵のオ、娘出かしやつた。此母が身一つな手にかゝるとは。目の内に見えなれど。切刻まれても厭はねど。大切な聲も。所詮なき命なれば。肌身を穢し一に。代る其身は手柄者。オ、過分な刀に刺通せよ。と言含め遣はせども。女房。源氏の仇に身を任した。常盤御前の及ばう女業。不便の最期をさせまら未練な人。と言ふ母の顔打守り。前がよい手本。心の肌身を。ナ打解けす。と聞くより母は身も世もあられかすに居られうか。サア。肌ふれるは此身の覺悟。何す。さうぢや。と駈行く裾を引き。男であらうが鬼であらうが。是が泣事も私が胸に。ヤ此瀧口を清盛とは心とどめ。コリヤ狼狽でどこへござ。夫も珠数を繰返す。同向に。地よい。劔を抱いて寝るも一興。こる。どこへ行かうぞ。菊館へ駈行き。夫も珠数を繰返す。同向に。地より小田原の菊館へ立越え。酒宴の娘に加勢をするわいなう。サ、お心の移しける。女房に恐しきはなし。上で比翼の床入。その時にはコリヤ初せくは尤もながら。多勢の中へ踏ん込戀に凝つては千刃の劔の中もいとひな花。今の悲しい其涙を。上野様おいと。親子諸共三途の道づれ。ヤ何と。く。漸う通れ駈戻る。顔は粉はぬ。いと。嬉し涙にしつぽりと。泣かせサアせめてあなたはお命全う。一遍の初花ぢやないか。勝五郎様。よう爰に見せうサアおぢや。と引立てられ香花を手向けてやつて下さりませ。居て下さした。としがみ付く。て行く思ひ。見送る思ひも驚奮の。胸と頼む夫も頼まるゝ母も涙にく母親は。顔見て悔り。ヤアそなたは娘。

恐しい敵の中マどうして抜けておぢやつた。堀嬉しい中にも氣はそゝろ。勝五郎面をあらゝげ。詞我々を慕ひ歸りしを。貞心とはいひたけれど。夫婦の縁も今日限り。妻でない。女房でないぞ。エ、。そりやマアどうして。何故に。ヤア何故とは狼狽者め。我腰抜けとなつたる上。敵は氏政加勢すれば。八十萬騎に餘る助太刀。女ながらも近寄るこそ幸ひ。肌を許させ一刀にても刺通せと。最前常盤に準へて。申し含め遣はせしに。命を惜しみのめくと。立歸つたる不覺者。何を言うても此體。一足だにも引かれぬ苦痛。堀さあればどて斯くまで思ひ込んだる我が存念。やはか晴さで置くべきかと。用意の刀杖となし。立上れども踏みためず。どうと轉びつ道廻り。チエ、淺ましや。いかに天命つくればとて。得難き時の

際となり。神も佛もかほど迄見放し給。敵の手へ捕はれて行くは幸ひ。どうぞふか口惜しやと。スエテ大聲上げて叫びすかして一刀にても。恨みんものところ



泣き。堀初花夫を打守り。詞ソレ。其様を思へ。お前の機嫌を損ねうとて。私やに薬病を。悔ましやんすかいとしい故。戻つて來やせぬわいな。モウくく

いふに言はれぬ。せつない。悲しい憂なうぞ。死にやせぬ／＼と。思ひ目をして。戻つて來たもな。お前の病詰めたこの願望。幸ひ爰に流れ寄る。氣を今一度。おのれと思ふ一念で。殘この水上は向ふの瀧津瀬。白瀧と心に つた願が満てた故。ヤア娘何といや 念じ今一度の願を満て。權現納受ましますか。驗を爰にて試し見ん。地とかは御存じない筈。そも鎌倉を出でしより。計らず夫の大病。冷え病ひに腰膝しびれ。瘧となつたる業病。敵が討たれぬ／＼と。悔む主より女の身で。傍その身は。木傳ふ猿オトリなんなく。で見える目が。地フシいと怪しく。今一度瀧に近寄れば。音凄まじく飛散る水勢。白糸亂す瀧の面。さんぶと飛込みどう私を命を代りに立て。この箱根の權現様。／＼と。落ちくる水を掬ひ上げ。念力がその間。朝夕兩度身を打たれ。垢離物狂はしく髪逆立ち。フシ身の毛もよに清めて捧げる命。日數も満ちて百日だつばかりなり。地操を感じて母夫祈に。今朝まで行を遂げおふせ。今一度誓を添へて諸共に。合掌したる後より。内。寄せくる形見取得る母。折から一にて滿つる願。悲しや思はぬ災難で。身親ひ出でたる勿川久馬。飯沼めがけ斬つの首引つ提げ。戻る奴の筆助が。そは捕はれとなつたれども。夫の爲に權込むを。心得ひらりと飛んだるはすみ。れと見るよりどつかと坐し。地チエ、現へ捧げたこの身。のめ／＼と何の死すつくと立つたる勝五郎。悔りしなが口惜しや初花様は。敵上野が手にかゝ

ら打込む刀。久馬が首は花火の白玉。地虚空はるかに飛散つたり。地母は見るより打驚き。地ヤア／＼。こなたは足が立つかいの。地と言はれて其身も心付き。地扱こそ／＼。初花が念力の。奇特正にあらはせしか。地チエ、有難い。地フシとぞく／＼小躍り。地母は嬉しく仲上り。地コレ／＼娘。そなたの祈誓は届いたぞやと。地いふ聲響く瀧の面。凝らす兩眼見開きて。あら／＼嬉しや。權現納受あつたるか。いふぞと見えしが一團の靈火閃めきて。俄に山鳴り震動し。ありし姿は脱の衣。血汐の小袖瀧に。フシ流れ落つるぞ

り御最期でござります。地とわつとひれ上野め。ぼつ駈けて一討ちとは存じ御は刃に身を捨てゝ。思ふ男に添ひ遂れ伏す忠義の涙。飯沼不審晴れやらたれども。若旦那の御身の上が氣遣ひげさせ。初孫産ませて華々しく榮える。今今まで爰にありつる初花。心願さに。戻つて聞けばこの有様。何の事末を見ようぞ。と思つた事も水の泡。夫満つると其儘に。姿は消えて小袖のみ。だ。どがらちやがらと。嬉しいと悲しいといひ娘まで刃にかゝるのみならず。爰にとゞまる一つの不思議。ナニ。初花とがごつちやになつて。一向この奴め娘は五體も離れぬ。切れぬにまで様は今まで爰に。オイナウ。聖殿の業はとんと譯が分らない。夢ではないかなりしと聞く。この胸の苦しさはどの病治さんと。我が一命を權現様へ捧げ。地フシと呆れ顔。勝五郎心付き。詞扱は様にあらぞいなう。是を思へば先達つ祈つた驗。聖殿の病氣は平癒コレ腰膝我が詞を守り。上野を恨みんと。斬付て死んだが増であつたもの。味氣なきが立つわいの。ナニ。若旦那の御病氣けたれども女業。返り討になつたるよ世の憂目やと。わつと一度に聲立てゝ。平癒し。お足が立ちしとな。エ、忝なヤア。そんなら今のは。幽霊であつたかいなう。コレ。此お首が。初花様でい。お足が立つかいやい。ハ、たかいなう。コレ。此お首が。初花様でい。ハ、敵の様子窺はんと。大磯へ駈行ごわりますわいの。地と見せる現世の倅の非人は大勢從へ駈來り。詞ヤア堪め。く道にて取巻く多勢。合點行かねば組を見る目もくれて勝五郎。詞扱は。凝り最前はよう手ひどい目に合はしたな子を捕へ。締上げて様子を聞けば。初周まつたる一念にて。かゝる奇特を見ア。其代りに手下ども連れて來たのも花様を奪取らん工の次第。聞くと共にませけるか。ハア出かいな。地と聞くよ侍の頼み。街妻めさへたくつたら。親ゝ一足飛び。無二無三に斬込めば。奴り母は正體なく。ほんに武士ほど世のめもおのれもぶち殺せと言付けられたが手並に皆ちり。その跡見れば女中にはかない者があるかいなう。蝶よは寶ナホエの山。息の根さへ止めたら。の死骸。五體も切れ。離れ。よ花よと思ひ子の。戀に病む目がいちらか。金ちや。かゝれ。地と一同に。群りく。見れば初花様。南無三寶。おのしさ。添はしてやり度いばかりに父か。くれば飯沼筆助難立て。く追つ散

らせば。詞ヤア燐めが足が立つた。燐の場所は箱根の切所^{きしよ}。先へ廻つて其方御出でと勇み立ち。地母も支度と娘の
めが足が立つたくと地一同に。フシは。一々同勢改めよハツハ、、、面首。形見の小袖にしつかりと結ぶ。其
むら／＼ばつと逃散つたり。地追ふも白し／＼。加勢いかほどあるとても。の間に飯沼が。車に仕込みし用意の着
無益と勝五郎。コリヤ／＼筆助。詞正奴の忠義の切先にて斬伏せ。地斬伏せ込。姿は昔に返り咲き。武運も光る玉
しく敵は氏政が同勢に紛れん間。勝負上野を。引摺り出すは隣ぐ内ヲシイザ櫛笥箱根を。さして三更へ急ぎ行く。